オンライン開催の日本語教育関連学会・研究会の発表形式のバリエーション
―学会に参加することの意味の再考―

中川健司（横浜国立大学）、角南北斗（フリーランス）...

Variations in Presentation Formats for Online Conferences Related to Japanese Language Education: Reconsidering the Meaning of Attending Conferences

NAKAGAWA Kenji, Yokohama National University　SUNAMI Hokuto, freelance

要旨：コロナ禍の影響で、2020 年度に多くの日本語教育関連の学会、研究会がオンラインで開催された。本発表では、オンライン開催された学会・研究会での口頭発表、ポスター発表の形式を「同期と非同期」と「インタラクション」という観点で分析した。その結果、口頭発表はほとんどの学会で対面式のやり方を維持し同期型（リアルタイム）で行われたのに対し、ポスター発表はより多様な形式で非同期で行った学会が多かった。非同期型の発表形式は、時間的な制約が小さいという長所もあるが、動画の事前視聴等の学会参加の準備をしない参加者が多い場合、発表者、参加者双方について学会に参加することにより得られる利益が減じる可能性が示唆された。

キーワード：日本語教育関連学会・研究会、オンライン開催、発表形式、学会参加の意味

1.　はじめに

コロナ禍の影響で 2020 年前半に予定されていた日本語教育関連の学会、研究会（以下、学会とする）は、対面式で行うことができなくなり、軒並み中止となった。その後、2020 年半ばから多くの学会がオンラインで開催されるようになった。従来の対面式の学会発表では、口頭発表もポスター発表も、必然的に発表から質疑応答という一連の流れはリアルタイムで行われてきたが、オンライン開催の場合、対面式の学会のやり方をそのまま踏襲することはできず、新たに発表形式を決める必要があった。本発表では、2020 年度にオンラインで開催された 7 つの学会の口頭発表、ポスター発表の形式を「同期と非同期」と「インタラクション」という観点で分析し、学会発表をすることの意味、発表を聞き議論することの意味を再考する。なお、本発表の調査対象は以下の 7 学会である。

a. 第 29 回小出記念日本語教育研究会（2020 年 6 月 27 日開催）
b. 第 25 回留学生教育学会・年次大会（2020 年 9 月 18-19 日開催）
c. 第 55 回日本語教育方法研究会（2020 年 9 月 12 日開催）
d. 第 17 回マレーシア日本語教育国際研究発表会（2020 年 10 月 3 日開催）
e. 2020 年度日本語教育学会秋季大会（2020 年 11 月 28-29 日開催）

f. 第 31 回第二言語習得研究会全国大会（2020 年 12 月 12-13 日開催）

g. 第 11 回 日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11) （2020 年 12 月 20 日開催）

2. 各学会の発表形式

2.1 口頭発表の形式

上記の a.~g.の 7 学会のうち 6 学会で口頭発表が行われた。表 1 に各学会の口頭発表の形式を示す。口頭発表が行われた 6 学会のうちの 5 学会では説明から質疑応答まで同期型（リアルタイム）で実施された。この 5 学会全てが対面式の学会開催時と発表時間を揃えたことからも、従来の形式を維持しようとしたことがうかがえる。コロナ禍で急速に普及したオンライン会議ツールが、従来の口頭発表の形式との相性が良いという面もあるだろう。同期型で口頭発表を行う最大の利点は、参加者が慣れている対面式に近いことだと言えるかもしれない。短所としては、発表時間が固定されてしまうために、対面式の場合と同様の時間的な制約がある（指定された時間に発表を聞かなくてはいけない、同じ時間帯の発表を複数聞くことはできない）ことが挙げられる。そんな中 e.は唯一発表部分を動画の事前視聴という形にし、質疑応答のみを同期型で行っている。動画の事前視聴は、時間的な制約がなく、参加者はいつでも好きな時に発表内容に触れることができること、同じ時間帯に行われる口頭発表についても発表を聞くことができること、また動画を止めながら見たり、繰り返し見たりといった形で参加者が自分の理解に合わせて視聴できることが利点として挙げられる。逆に短所としては、動画作成が発表者の負担になる、参加者が動画の事前視聴をしていない場合有意義な質疑応答ができないといったことが挙げられる。

表 1：口頭発表の形式

	発表件数	発表時間	対面式の発表時間		発表内容の説明	予稿共有方法
a.	4	30 分	30 分		同期型	研究会サイトより事前ダウンロード
b.	24	30 分	30 分		同期型	Google ドライブ上にアップロード
c.						前回研究会会誌を利用 [1]
d.	6	30 分	30 分		同期型	研究会サイトより事前ダウンロード
e.	29	20 分	30 分		非同期型（動画の視聴）	学会サイトより事前ダウンロード
f.	6	30 分	30 分		同期型	Slack 上より事前ダウンロード

g.	26	30 分	30 分		同期型	OneDrive より 事前ダウンロード

口頭発表の形式については、同期型にして参加者が共時的に発表を聞くことを重視するか、非同期型にして好きな時に繰り返し見られるという発表内容へのアクセスのしやすさを重視するか、ということが形式を考える上での大きなポイントとなっていると言える。

2.2　ポスター発表の形式

口頭発表と比べると、ポスター発表の形式はより多様であった。ポスター発表を実施した 6 学会のうち、説明部分が同期型であったのが 2 学会、非同期型であったのが 4 学会であった。非同期型の内訳は、説明部分を予稿で代替したもの、動画を公開したものがそれぞれ 2 学会ずつであった。また、質疑応答についても同期型と非同期型がそれぞれ 3 学会であり、非同期型の 3 学会では、発表者と参加者の間でテキストベースのやり取りが行われた。これらの学会で非同期的なツールが一部ないしは全面的に採用されているのには、口頭発表とは異なる、ポスター発表の持つインタラクションに対する模索が感じられる。2.3 で見たように、口頭発表では、ほとんどの学会で同期型が採用され、発表時間についても対面式の時のものが踏襲されており、従来の形が維持される傾向が強い。それに対して、ポスター発表については、非同期型のものが多く、同期型のものについても対面式の時と比べると発表時間が大幅に短くなっている。

表 2：ポスター発表の形式

	発表件数	発表時間 （質疑応答時間）	対面式の 発表時間	発表内容の 説明	質疑応答
a.					
b.	12	×	120 分	非同期型 （予稿で代替）	テキストベース （Google ドライブ）
c.	6	60 分	90 分	同期型	同期型
d.	12	×	40 分	非同期型 （動画の視聴）	テキストベース （YouTube のチャット）
e.	27	25 分	90 分	非同期型 （動画の視聴）	同期型
f.	8	90 分 （Slack 上）	80 分	非同期型 （予稿で代替）	テキストベース (Slack 上)
g.	16	30 分	80 分	同期型	同期型

中川・河野（2021）では、ポスター発表の特徴として以下の 4 点を挙げている。

①発表内容がポスターにコンパクトにまとめられているので、研究の概要が把握しやすい

②発表者と参加者の間（または参加者同士）で活発な議論を行いやすい
③参加者や出てくる質問によって柔軟な発表のしかたができる
④決められた時間内に多くの発表に参加可能
上記 6 学会で採用されたポスター発表の形式において、これら 4 点のメリットがどの程度期待できるかをまとめたものが表 3 である。

表 3：ポスター発表の形式と期待されるメリット

学会	発表部分	質疑応答	①	②	③	④	デメリット
c. g.	同期型	同期型	○	△	○	△	発表件数が限られる
e	動画の視聴	同期型	○	△	×	△	動画作成、視聴が負担
d	動画の視聴	テキストベース	○	△	×	○	動画作成、視聴が負担
f	予稿で代替	テキストベース	○	△	×	○	説明がポスターに沿ったものではない

なお、これらは目安に過ぎず、発表形式の詳細や使用するオンライン会議ツールの機能等によって程度の違いがある。どの学会においても発表用ポスターは事前ダウンロードやプラットフォーム上に提示という方法をとっていたので、①の研究の概要の把握が容易というメリットは享受できるものと考えられる。ただし、発表時には、ポスターの一部を拡大して説明することが多く、その際にはポスター全体の中のどの部分を示しているか、参加者が直感的に把握しづらいというデメリットはあったようである。オンラインでのポスター発表でのコミュニケーションの取り方は、対面式とは大きく異なるため、②の活発な議論を行うためには配慮が必要とされる。質問したくても、ターンテイクが難しく、気軽に発話することができない場合もあるのではないか。また、テキストベースで質疑応答を行っていた学会もあるが、データなどを用いてより詳細な議論ができるというメリットもある反面、そのスタイルに慣れていない参加者にとっては議論に参加するのを躊躇う要因となっているとも言える。③であるが、動画の視聴や予稿で代替という方法では、発表の説明が固定されており、参加者に合わせて柔軟な発表をすることは期待できない。④の参加できる発表数については、非同期型であればより多くの発表に参加することが可能であるが、発表、質疑応答が同期型の場合、自分が参加している以外の発表の状況が把握しづらく移動のタイミングが難しいため参加できる発表数が限定される傾向があるのではないか。

3. 学会に参加する（学会を開催する）ことにより得られる利益とオンライン開催の影響

ここでは、発表者、参加者、学会運営者の三者が、学会に参加する（学会を開催する）ことによって得られる利益について、口頭発表の場合を例にとって考えてみたい。口頭発表に絞って議論するのは、表 1 からもわかる通り、口頭発表を行った 6 学会全てで質疑応答を同期型で行っており、そこでのフィードバックが発表者の利益に大きく関わると

考えられるからである。まず、発表者が学会で発表することによって得られる利益は、主に自分の研究内容を参加者に知ってもらうことと、それに対してフィードバックをもらうことの 2 点である。参加者が学会に参加する（発表を聞く）ことによって得られる利益は、発表者のそれと裏返しで、ほかの研究者の研究内容を知ること、発表者と議論を行うことの 2 点ということになる。そして、学会運営者が学会を開催する目的は、発表者および参加者が上記の利益を得る機会を提供することによって、その分野の研究を推進することであると言えるだろう。

それでは、オンライン開催した場合、発表者、参加者が期待する上記の利益が対面式と比べてどう変わってくるのかについて考えてみたい。まず、発表者が自分の研究内容を知ってもらう、参加者が他の研究者研究内容を知るということについての点であるが、発表を同期型で行う場合は、対面式に比べて大きな違いはないと考えられる。発表に基づく質疑応答や議論についても、ターンテイクの難しさはあるにしろ、同期型での発表であれば大きな違いはないと考えられる。動画の事前視聴という形式は、2.1. で述べたように、時間的な制約がないほか事前に動画を繰り返し見ることができる等の長所があり、それが活用されれば、より多くの参加者が研究内容をより深く理解してくれることも期待できる。また、オンラインでは、口頭による質疑応答以外にテキストベースでのやりとりも可能であるため、発表者や参加者がそれらを活用できればより深い、より多くのフィードバックを得ることも可能である。しかし、オンラインで、動画の事前視聴をしない参加者が多いと、発表内容は共有されず、内容を踏まえた質問はできないことになる。結果として有益なフィードバックは得られなくなってしまう。そうすると、発表者は動画の作成という対面式にはない負担があるにも関わらず、研究内容の周知もできず有益なフィードバックも得られないということにもなりかねない。オンライン学会での発表者による動画を事前視聴しない参加者が多かったという指摘もある[2]。

参加者が学会に参加する利益についても同様で、発表が同期型で行われる場合には、研究内容を知ることということについては大きな違いはないが、事前動画の視聴という形の場合には、時間的制約がなく発表内容へのアクセスのしかたが柔軟になる一方で、動画を事前視聴しないで学会に当日参加するだけでは、研究内容の理解にはつながらない。対面式の学会の場合、発表の場にいるということと、その発表の内容を知るということはほぼ同義だが、オンライン学会の場合には必ずしもその前提は成り立たない。動画を視聴しない参加者が研究内容を理解するという利益を享受できないのはある意味でしかたがないが、そのような人が一定数以上いるという事態になると、有益なフィードバックや活発なディスカッションが行われず発表者やほかの参加者の利益を損なうこととなり、学会運営者のその分野の研究を推進するという目的も達成できないことになる。

4. おわりに

コロナ禍以前は、開催側としてイベント全体もコンテンツ（発表）も同期的な設計が前

提で、そこには発表者と参加者、または参加者同士のインタラクションが自動的に付随していた。参加者もそれを前提として学会参加をしてきたと考えられる。その意味で「参加度のグラデーション[3]」というものが一定の幅に収まっていたとも言える。対面式の学会では口頭発表にしても、ポスター発表にしても発表形式はほぼ固定的で、学会側が口頭発表やポスター発表に求めるものを発表形式に反映させる余地はなかっただろう。しかし、コロナ禍の現在、学会のオンライン開催が広がりつつあるが、気軽に参加できる分、参加者の「参加度のグラデーション」の幅も広がっているため、開催側もそれを念頭に置いて発表形式を検討する必要があるのではないか。幸いオンライン開催では、非同期型の設計も行うことができ、求めるインタラクションの種類や程度によってツールも選択することができるようになっている。それを考えると、学会開催側は、口頭発表、ポスター発表のそれぞれについて、発表者が発表することによって何を得ることを目指すのか、参加者が発表を聞き、議論することによって何を得ることを目指すのかということを再考し、それを発表形式に反映させるべき時期に来ているのではないか。

もちろん、本研究で対象としたいずれの学会もコロナ禍に対応するために初めての試みとして試行錯誤の中オンラインで学会開催をしたわけで、その意味で各学会の目指している発表の形が、開催方法に十分に反映されているとは言えない面もあるだろう。しかし、コロナ禍の終息の見通しが立たない現状では、オンライン学会は当面継続されるであろうし、終息後も、対面式の学会と並行してオンライン学会が開催される可能性は高い。そのような状況では、各学会が「イベントとしてどんな体験・どんな価値を提供するのか」を突き詰めて考えてデザインする必要がある。それが、ひいては学会発表や学会そのものの価値を決めることにもなるのではないか。同時に、発表者、参加者の側も、「自分はこのイベントに参加することによって何を得ようとしているのか、そのためにコストを負担する用意があるのか」ということを考える必要があるのではないか。

注

1．c.では、コロナ禍で中止となった前回研究会の発表者への機会の提供、運営委員の負担軽減という理由により、新規発表は募集せず、予稿集も発行しなかった。

2．以下の記事では、2021 中東・北アフリカ日本語教育シンポジウムへの参加の際動画を事前視聴した参加者が少なく、質疑応答が機能しなかったという事例が紹介されている。「Y: 68 オンラインシンポジウムに参加してみて」
https://note.com/yonenote/n/n1bd23ad64613

3．上記の「Y: 68 オンラインシンポジウムに参加してみて」では、「Zoom にいる人の前提（共有）条件が、オンラインだと違いが出てくる」とした上で、「イベントへの参加度も幅が出ている」ことを「参加度のグラデーション」と呼び、対面式と比べてオンリアンの方が「参加度のグラデーション」の幅が大きいとしている。

参考文献

中川健司・河野俊之. 2021「JLEM：オンラインでの効果的なポスター発表方法検討のための試行」『日本語教育方法研究会研究会誌』27 巻 1 号. 72-73